

2017京都大学のFD

—京都大学の教育を、語り合う—



2017 Mutual **F**aculty **D**evelopment



2017京都大学のFD

ー京都大学の教育を、語り合うー

2017 Mutual Faculty Development

- | | |
|----|---|
| 01 | I. ごあいさつ |
| 02 | II. 全学教育シンポジウム |
| 05 | III. 新任教員教育セミナー |
| | IV. プレFDの取り組み |
| 07 | 1. 大学院生のための教育実践講座 |
| 08 | 2. 文学研究科プレFD |
| 10 | 3. 大学コンソーシアム京都・単位互換リレー講義 |
| 11 | 4. 研究科横断型教育プログラム「大学で教えるということ」 |
| 12 | 5. 人間・環境学研究科における院生発案型プレFD「総人のミカタ」 |
| | V. ICTの教育的利用 |
| 13 | 1. オープンコースウェア (OCW) |
| 14 | 2. KyotoUx: 大規模オープンオンライン講義 (MOOC) |
| 18 | 3. KoALA: 小規模プライベートオンライン講義 (SPOC) |
| 19 | 4. ICT活用教育のためのポータルサイト (CONNECT) |
| 23 | 5. PandA連携ワーキンググループの活動 |
| 25 | 高等教育研究開発推進センターウェブサイトリニューアル
FD研究検討委員会概要 |

I. ごあいさつ

FD研究検討委員会委員長
飯吉 透



本FD研究検討委員会は、2006年に研究科長部会の下に特別委員会として設置され、高等教育研究開発推進センターの協力を得て京都大学のFDを企画・実施してきました。本報告書は、これらのFD活動の概要を学内の皆さまに具体的にご紹介するために、毎年作成されているものです。

大学設置基準の改正によってFDが義務化されてから10年以上が過ぎ、また本委員会も10周年を迎えました。本報告書の中でも取り上げられているように、本学においても、本委員会や全学・各部局の努力によってFDに関する様々な取り組みが継続的に行われており、FDは制度的には一定の普及と定着がはかられてきました。

我が国においてFDが義務化された当時は、授業改善や各教員の教育力の向上という、どちらかと言えば「ミクロ的」な側面に関心が集中する傾向が見られました。しかし近年は、GPA、キャップ制、コースツリー、新たな入学選抜方式、単位互換、ジョイント/ダブルディグリー等の導入、3ポリシー（アドミッション、カリキュラム、ディプロマの各ポリシー）の改訂や高大接続、ICTの教育的活用、さらには種々のデータに基づいた大学教育力の強化等、多種多様な教育制度改革や教育改善に取り組むことが、学科・学部・大学院・全学など様々なレベルにおいて求められています。そのような中で、本学におけるFDも、これまでの一次的なFDを延長していくだけでは不十分であり、教職協働さらには学生をも巻き込んだ教育改革・教育改善プロジェクトを通じた、多面的・多元的な展開が必要な局面を迎えていると言えるでしょう。

次章でも報告されているように、2017年度の「全学教育シンポジウム」は、「社会とつながる京都大学の教育」というテーマで開催されました。昨今、大学の社会的なミッションや役割が問われ、さらに2017年6月の指定国立大学法人の指定も受け、本学の教育力と研究力の一層の強化が進められる中、学部・大学院教育における養成する人材像と教育課程の明確化や、社会とつながる京都大学の教育的取組としての高大連携や地域連携等に関する実践や活動等の報告を受け、「京都大学の教育の強みを今後どう見極め、育み、社会に発信していくか」について、パネルディスカッションや質疑応答、クリッカーによって参加者から寄せられた回答等を通じて、活発な議論や意見交換が行われました。

本学の教育における重点的取組課題の一つである「ICTを活用した教育の推進」については、本年度はMOOC（大規模オープンオンライン

講義）12講義（理系7講義・文系5講義）が開講され、海外から多くの受講者を集める一方で、学内においても反転授業や予復習のために補助的に利用されるなど、その活用方法も多様化しつつあります。

さらに本年度からは、グローバルな受講者を対象としたMOOCに加え、本学の各部局・教員・教育プロジェクトが、主として本学の学生を受講者として提供するSPOC（小規模プライベートオンライン講義）用プラットフォーム「KoALA」の本学における運用が始まっています。SPOCは、MOOCと同じ仕組みやプラットフォームを利用しますが、MOOCのように大規模な公開ではなく、本学の学生や許可された学外の受講者・学習者に限定してオンライン講義・電子教材の配信を柔軟に行うことができるシステムであり、またOCW（オープンコースウェア）のように講義映像や映像教材の配信を行うだけでなく、課題の提出や採点、分析・評価等の機能を備えているため、既存の対面講義と組み合わせ、より多様で柔軟な方法で学生の主体的学習や自学自習を支援することが可能です。本報告書では、本学におけるSPOCの試行的取組が簡潔にレポートされています。SPOCの利用を通じて収集される学習データは、担当教員やスタッフにフィードバックされ、SPOC利用や対面による授業改善に役立てることができるため、今後の本学におけるFDや教育改善の推進という観点からも、重要な役割を果たしていくことが期待されます。

また、昨年度に立ち上げられた、ICTを活用した教育の推進のためのポータルサイト「CONNECT」の最新コンテンツや、本学の教員や各部局の抱える教育的な課題の解決・改善に繋がるリソースや手掛かりを手軽に見つけることができる高等教育研究開発推進センターの新しいウェブサイト（2017年7月にリニューアル）についても紹介されています。本報告書では、この他にも「新任教員教育セミナー」や「大学院生のための教育実践講座（ブレFD）」をはじめ、全学や各部局の精力的なFDの取組や事例が網羅されていますので、是非お目通しいただくとともに、今後の勉強会・ワークショップや新たな活動企画についても幅広くご意見・ご提案いただければ幸いです。

最後になりましたが、今後とも本学におけるFDのさらなる充実を図ると共に、各部局で催されるFD研修会やワークショップ等の情報共有や「相互乗り入れ」なども、本報告書や本委員会の活動等を通じて活発に支援してまいりますので、各部局の教職員の皆さまには、より一層のご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

II. 全学教育シンポジウム

「社会とつながる京都大学の教育」



概要

9月8日、桂キャンパス「船井哲良記念講堂」を会場とし、教職員223名の参加を得て、第21回全学教育シンポジウムを開催しました。

京都大学では、1996年以来、毎年、全学教育シンポジウムを開催し、教養・共通教育や大学評価など、様々な教育課題を取り上げてきました。昨今、大学の社会的なミッションや役割が問われていますが、さらに本学は、2017年6月に指定国立大学法人の指定も受け、教育力と研究力の一層の強化が進められています。そこで、21回目にあたる今回のシンポジウムでは、「社会とつながる京都大学の教育」をテーマに設定し、多様な観点からこのテーマについて考えることにしました。

午前の部では、京都大学を取り巻く教育改革の現状や方向性に関する北野正雄教育担当理事・副学長の基調講演に続いて、本学の人文・社会科学分野の5専門教育部局長（現・

前）にご登壇いただき、人文・社会科学系の教育の現状と今後の課題について、ご報告いただきました。これは、先に実施された「養成する人材像と教育課程を明確化するための検証プロジェクト」（『人を見つめるちから×社会を動かすちから—京都大学人文・社会科学の教育—』2017年3月）から得られた知見の共有を目指すものです。

午後の部は、社会の中における京都大学のありかたについて俯瞰し展望する山極壽一総長の基調講演に始まり、社会とつながる本学の教育的取組として高大連携や地域連携等に関する実践や活動についての4つの報告を共有した後、本学の教育の強みをどう見極め、育み、社会に発信していくかについて、執行部から5名の方にご登壇いただき、パネルディスカッションを行いました。クリッカーを使いながら、会場からのレスポンスをふまえて活発な意見交換がなされました。



プログラム [司会進行：山田 剛史 高等教育研究開発推進センター准教授]

午前の部

10:00～ **開会挨拶・基調講演 1：「京都大学が直面する課題と教育改革の方向性」**

北野 正雄 教育担当理事・副学長

10:30～ **テーマ1：パネルディスカッション**

「京都大学の教育の今とこれから：人文・社会科学系からの提言」

10:35～ **《モデレーター》** 飯吉 透 理事補（教育担当）・高等教育研究開発推進センター長

《パネリスト》 北野 正雄 教育担当理事・副学長

川添 信介 学生担当理事・副学長

平田 昌司 文学研究科長

高見 茂 前教育学研究科長

潮見 佳男 前法学研究科長

文 世一 経済学研究科長

杉山 雅人 人間・環境学研究科長

12:30～ 昼食・休憩

午後の部

13:40～ **基調講演 2：「京都大学の教育体制を世界の大学のデータから展望する」**

山極 壽一 総長

14:00～ **テーマ2：「社会とつながる京都大学の教育：高大連携・地域連携」**

14:05～ **《テーマの説明》** 松下 佳代 高等教育研究開発推進センター教授

《報告・質疑応答》

高大連携（ELCAS）：村上 章 副ユニット長、農学研究科副研究科長・教授

高大連携（京大オープン教材）：田口 真奈 高等教育研究開発推進センター准教授

地域連携（教育問題解決の支援）：桑原 知子 理事補（広報担当）・

教育実践コラボレーションセンター長・

教育学研究科教授

地域連携（サービス・ラーニング）：佐山 敬洋 防災研究所准教授

15:35～ 休憩

16:00～ **テーマ3：パネルディスカッション**

「京都大学の教育の強みをどう見極め、育み、社会に発信していくか」

《モデレーター》 飯吉 透 理事補（教育担当）・高等教育研究開発推進センター長

《パネリスト》 山極 壽一 総長

北野 正雄 教育担当理事・副学長

川添 信介 学生担当理事・副学長

木南 敦 理事補（教育担当）・法学研究科教授

東島 清 監事

16:55～ 閉会挨拶

17:00 終了

17:15～ 情報交換会 カフェ「Arte」



全学教育シンポジウム

参加者の声

参加された先生方のご感想・ご意見をうかがうために、アンケート調査を実施しました（有効回答数116件、回収率52.0%）。興味深かったプログラムとしてはテーマ2の「社会とつながる京都大学の教育：高大連携・地域連携（報告・質疑応答）」（48.3%）が最も多く挙げられ、テーマ1「京都大学の教育の今とこれから：人文・社会科学系からの提言（パネルディスカッション）」（42.2%）、テーマ3「京都大学の教育の強みをどう見極め、育み、社会に発信していくか（パネルディスカッション）」（39.7%）と続きました（図1）。「普段知らなかった高大連携等の話がお聞きできて良かった」「各登壇者を通して京都大学の教育に対する考え方がわかったのでとても有益だった」といった感想もあり、プログラム自体は概ね好ましく評価されていました。

また、小規模な勉強会・ワークショップに参加したいと思うテーマでは、世界の研究大学の教育改革（38.8%）、中退者・成績不振者への対応（25.9%）、英語による授業（24.1%）、ICTの教育的利用（20.7%）などが多く挙げられており（図2）、シンポジウムで扱ったテーマへの関心の高まりも感じられました。その他にも、「日本の大学でいかに協力して日本の地位を保つか」「学生のグローバル化教育／キャリア教育」「学生のメンタルヘルズ管理」といったテーマが挙げられました。

感想の中には報告内容についてのクリティカルなコメントや、まだ取組が不十分なのではという意見も寄せられました。これらの結果から、それぞれの参加者が京都大学の教育改革の方向性について、また京都大学の存在感をどのように高めてそれをどう発信していくかなどについて振り返り、ともに議論する機会を提供できたのではないかと考えられます。

※アンケートの回答については複数回答可であったため、合計は必ずしも100%にはなりません。

詳細は『第21回全学教育シンポジウム報告書』
(<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/activity/symposium.php>)
をご覧ください。

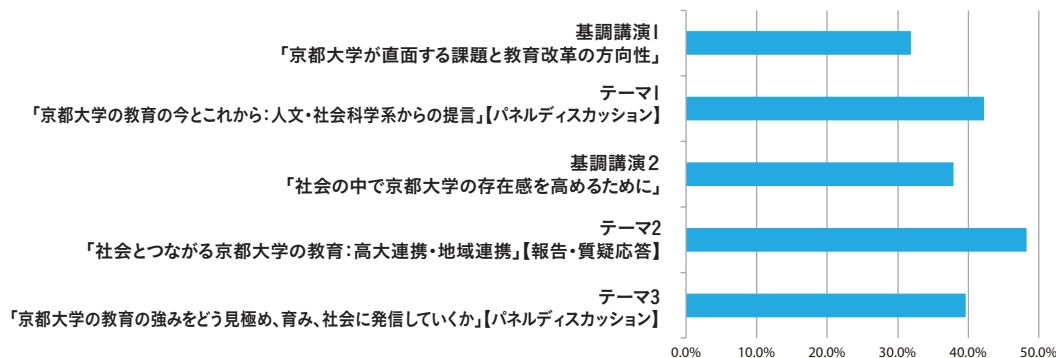


図1 興味深かったプログラム

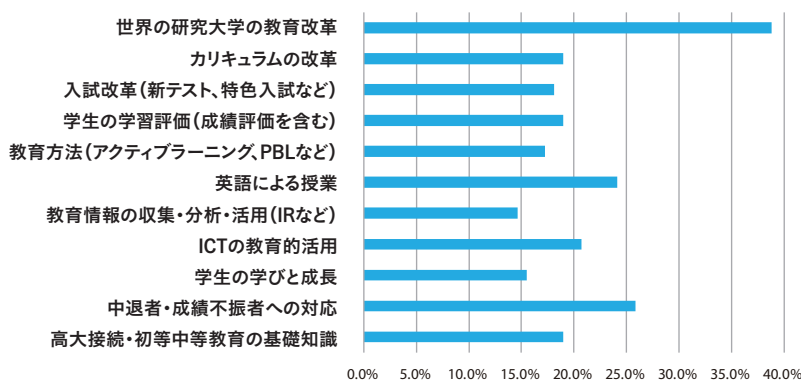


図2 小規模な勉強会・ワークショップに参加したいと思うテーマ

Ⅲ. 新任教員教育セミナー

9月6日、百周年時計台記念館にて、「京都大学新任教員教育セミナー2017」を開催しました。本セミナーは、2017年度が第8回目となり、本学に採用された新任教員および助教から昇任された教員を対象に実施しています。

本学らしい教育のありかたについて考えたり、学内に存在する様々な教育支援について知っていただいたり、実際に直面している教育に関する問題や学生指導上に関わる課題などについて共有したりする場所になるようプログラムを作っています(表1)。

今回の参加者は69名(教授7名、准教授18名、助教29名、講師14名、助手1名)でした。セッション1では、北野正雄教育担当理事より「現在の大学教育の動向と京都大学の教育改革」と題したオープニングレクチャーがありました。セッション

2では、伊勢田哲治文学研究科准教授より「埋め込み型研究公正教育のすすめ」と題したミニ講義がありました。セッション3は、自身の授業実践を紹介する「私の授業」でした。今回は、金子周司薬学研究科教授より「薬学専門科目での反転授業とグループ学習の試み2017」と題した授業実践の紹介がありました。セッション4では、高等教育研究開発推進センターの山田剛史准教授、田口真奈准教授から「京大の教育・学習支援」について紹介がありました。セッション5は、参加型セッションとして、用意した5つのテーマごとに部屋に分かれてのワークショップがありました。最後のセッション6は、再度全体で集まってジグソー形式によるインテグレーションセッションを行いました。

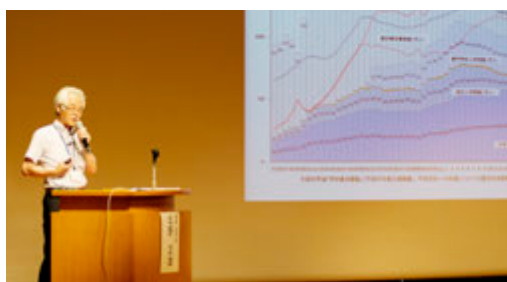
表1 2017年度京都大学新任教員教育セミナープログラム

13:00～	開会式 (司会: 高等教育研究開発推進センター准教授 山田 剛史) 趣旨説明 高等教育研究開発推進センター准教授 山田 剛史
13:05～	セッション1 オープニングレクチャー 「現在の大学教育の動向と京都大学の教育改革」 理事・副学長(教育・情報・評価担当) 北野 正雄
13:30～	セッション2 ミニ講義 「埋め込み型研究公正教育のすすめ」 文学研究科准教授 伊勢田 哲治
13:55～	セッション3 私の授業 「薬学専門科目での反転授業とグループ学習の試み2017」 薬学研究科教授 金子 周司
14:20～	セッション4 京大の教育・学習支援 高等教育研究開発推進センター准教授 山田 剛史/田口 真奈
14:30～	休憩
14:50～	セッション5 グループ別セッション(参加型セッション)(詳細は表2参照)
16:30～	休憩
16:50～	セッション6 インテグレーションセッション
17:30～	閉会式 閉会挨拶 FD研究検討委員会委員長・高等教育研究開発推進センター長 飯吉 透

Ⅲ. 新任教員教育セミナー

表2 セッション5 参加型セッションの各テーマと内容

【テーマ】	「英語による授業」を担当することになったら(参加者18名)
【担当講師】	情報環境機構長・国際高等教育院教授 喜多 一
【主な内容】	英語による授業を急に担当することになったとしたら困惑する教員も多いのではないだろうか。ここでは、そのような事態になった場合に、どのように考え、何から準備すればよいのかについて、参加者の先生方と一緒に考えたいと思います。
【ファシリテーター】	高等教育研究開発推進センター研究員 Nikan SADEHVANDI/河野 亘
【テーマ】	科学を「伝える」授業から、科学が「伝わる」授業へと転換するには(参加者9名)
【担当講師】	滋賀大学教育学部准教授(元京都大学iCeMS特任准教授) 加納 圭
【主な内容】	以下のような方々に、「科学的知識」(専門用語など)「科学の知識」だけでなく、科学の営みといった「科学についての知識」の両方を含む)が「伝わる」授業のコツをお伝えします。一方向の授業=伝える授業、アクティブラーニング=伝わる授業、という図式で捉えず、一方向の授業でも「伝わる」授業は可能だという前提で進めていきます。
【ファシリテーター】	高等教育研究開発推進センター特定助教 岡本 雅子
【テーマ】	困難を抱えた学生に向き合うには(参加者15名)
【担当講師】	学生総合支援センターカウンセリングルーム准教授 中川 純子
【主な内容】	修学上、研究指導上の不適応を起こした学生・院生に対し、教員はどう向き合えばよいのでしょうか。学生のその後の人生を大きく左右する時期に関わっていることを意識し、可能な対応を探るにはどうすればよいのでしょうか。今回は様々な不適応の様相の紹介と「困難」を知る、あるいは気づくための話の聞き方を体験・実習したいと思います。
【ファシリテーター】	高等教育研究開発推進センター特定助教 斎藤 有吾
【テーマ】	講義科目でおこなうアクティブラーニング型授業(参加者9名)
【担当講師】	高等教育研究開発推進センター教授 溝上 慎一
【主な内容】	50-150人規模の講義科目でどのように学生に授業に参加させるか、アクティブラーニング(講義で聴くだけでなく、書く、話す、発表するなどのアウトプットの学習活動を入れるか)を、理論的、実践事例を交えてセミナーをおこないます。後期からすぐ導入できるやり方・技法をお伝えします。アクティブラーニングについてまったく初めての方から、少しやったことあるが、この機会にしっかり学びたいという方まで参加可能です。
【ファシリテーター】	高等教育研究開発推進センター研究員 河合 直樹
【テーマ】	ICTを使って、普段の授業をもっと楽しく、ちょっと楽に(参加者14名)
【担当講師】	高等教育研究開発推進センター准教授 田口 真奈/酒井 博之
【主な内容】	インターネット上の教育リソースや既存のICTツールをうまく使うことで、授業準備が楽になったり、教育効果をあげたりすることができます。ここでは、学内のICT活用実践事例や、簡単に使える様々なリソースを紹介いたします。ICTを使うのはちょっとめんどくさい、と思っておられる先生にとっては、最初のハードルが下がるような、もっと使ってみたい、と思っておられる先生にはその可能性を感じていただけるようなセッションにしたいと思います。
【ファシリテーター】	高等教育研究開発推進センター特定研究員 安宅 純子



参加者の事後アンケート(56名)より、総合評価は「4.47」(「非常に有意義」から「まったく有意義でない」の5段階)と高い評価が得られました。また、上位項目としては、グループ別セッション(4.66)、インテグレーションセッション(4.58)、私の授業(4.53)でした。これらの値は年々向上傾向にあります。

参加して良かった点に関する自由記述では、「京都大学として教育にかける情熱が伝わって来ました。教員としての自覚を促されました。」「自分一人では思いつかない様な授業の進め方が紹介されたので参考になった。新任教員だけではなく、少し経験を重ねた人にも参考になると思った。」「実際に講義に

活用できるノウハウ(アイスブレイクの手法や情報の発信側、受信側の違いを知ることでできるワーク)について知ることができた点。」「他の研究分野の研究者と知り合うことができた。現在の大学をめぐる教育・研究の問題点を知ることができた。」「FDの機会がなかなか無く、すべての情報、また討論、交流が有益であった。」「皆さんエネルギーで、刺激を受けた。」など、様々な感想を寄せていただきました。

引き続き、先生方の声を聴きながらよりよいプログラムにしていきたいと思っています。

IV. プレFDの取り組み

I. 大学院生のための教育実践講座

本講座は、京都大学FD研究検討委員会が主催、高等教育研究開発推進センターが共催し、将来、大学教育に携わることを希望する本学の大学院生(PD・研修員などを含む)のために、ファカルティ(大学教員)へと自己形成していくきっかけとなる場を提供するプログラムです。今回で13回目となります。2017年度は、8月22日に、百周年時計台記念館2階で開催されました。

様々な専門分野から29名が受講し、大学教育の現状をおさえるための基本的な講義、それをもとに授業実践について多様な観点から検討するためのジグソー法を取り入れたグループワーク、劇団の方をお招きしてコミュニケーションデザインを学ぶボディワークまで、とても豊富な内容で、受講生それぞれが「大学でどう教えるか?」に対する考えを深めながら、大学

院生同士のネットワークを広げました。加えて、全てのプログラムに参加した受講生には総長名の修了証が授与されました。

研修会直後にアンケートを実施し、プログラム全体に対する満足度を5件法(1: まったく満足していない～ 5: 非常に満足している)で受講生に評価していただいたところ、満足度の平均4.8点と、非常に満足していただけたことがうかがえます。また、このような講座に対してどう思うかに関する自由記述では、「私の場合、現段階では大学教員を志すか迷っているの、本講座を通して実際に大学教育に携わるとはどのようなことなのか、ということに関して具体的なビジョンを描くことができ、進路決めの有用な判断材料となりました」など、このような講座の必要性を改めて感じる声をいただきました。

大学院生のための教育実践講座：<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/study/index.html>
<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/activity/kouza2017.php>

2017年度のプログラム

10:00～	開会式 挨拶：北野 正雄 理事・副学長
10:20～	セッション1 ミニ講義1「大学を取り巻く状況と多様な授業実践」：松下 佳代 高等教育研究開発推進センター教授
10:45～	セッション2 グループ討論1：「アクティブラーニング」「ICT活用」「多様性」「協働・協調学習」の4つの部会に分かれて議論
11:45～	セッション3 ランチと自由討論
13:00～	セッション4 コミュニケーションデザイン「演劇でコミュニケーションデザイン」：蓮 行 劇団衛星主宰
14:20～	セッション5 ミニ講義2「後輩たちに伝えたい大学教員になる前の準備あれこれ」：田中 一孝 桜美林大学リベラルアーツ学群専任講師
15:05～	セッション6 グループ討論2：ジグソー法により他の部会から得た意見やこれまでの講義の知見をもとに、部会別にさらに深く議論
16:05～	グループ討論整理
16:40～	セッション7 全体討論：各部会8分の発表と5分程度の質疑が行われ、活発な議論を展開
17:40～	ラップアップ
17:55～	閉会式 挨拶・修了証授与：飯吉 透 FD研究検討委員会委員長・高等教育研究開発推進センター長 閉会式終了後 情報交換会 (～18:30)

IV. プレFDの取り組み

2. 文学研究科プレFDプロジェクト

文学研究科プレFDプロジェクトは、文学研究科とFD研究検討委員会が共同で主催する、文学研究科のODによるリレー講義形式のゼミナールで、2009年度から実施されています。

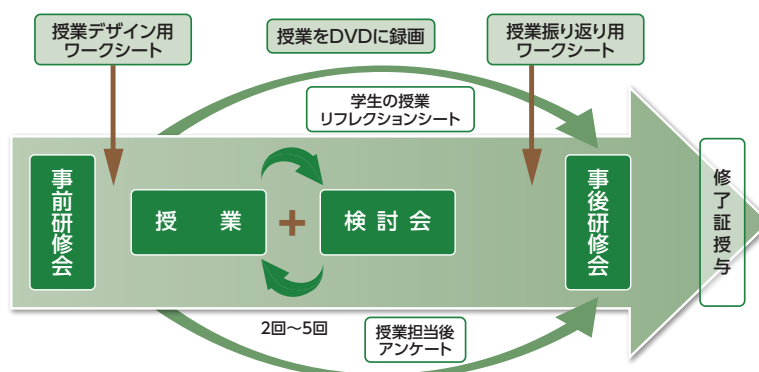
本プロジェクトは、年度はじめの事前研修会、各ODを講師とする2～5回の公開授業、他の講師およびコーディネーターを交えた授業ごとの検討会、そして年度末の事後研修会により構成されます。所定の条件を満たした講師には、本学総長よりプロジェクトの修了証が授与され、すでに約140名が修了証を得ています。

2017年度は、文学研究科よりコーディネーター4名、教務補佐員3名、講師20名が参加し、高等教育研究開発推進センターより3名がこれをバックアップする形で、行動・環境文化学系、哲学基礎文化学系と基礎現代文化学系の3つのリレー講義が展開されました。

本授業は、公開授業となっており、学内教職員の参観は随時可能です。日程などの詳細は、以下のウェブサイトをご覧ください。

●文学研究科プレFDプロジェクト

<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/literature/>



文学研究科プレFDプロジェクトの流れ

2017年度文学研究科プレFDプロジェクト実施体制

松田 素二：文学研究科教授／統括コーディネーター

板倉 昭二：文学研究科教授／行動・環境文化学系コーディネーター

出口 康夫：文学研究科教授／哲学基礎文化学系コーディネーター

伊勢田 哲治：文学研究科准教授／基礎現代文化学系コーディネーター

武田 龍樹：行動・環境文化学系教務補佐員

飯塚 一：哲学基礎文化学系教務補佐員

中山 俊：基礎現代文化学系教務補佐員

飯吉 透：FD研究検討委員会委員長・
高等教育研究開発推進センター長

松下 佳代：高等教育研究開発推進センター教授

田口 真奈：高等教育研究開発推進センター准教授

斎藤 有吾：高等教育研究開発推進センター特定助教



2017年度のプレFDを振り返って

統括コーディネーターから

2009年度に出発したこの文学研究科プレFDプロジェクトも、本年で9年目を迎えました。当初は、はたして文学研究科の「風土」「文化」に適合するかどうか危ぶむ声もありましたが、いまでは研究科の教育面にしっかり定着したようです。2017年度も昨年度に引き続き哲学基礎文化学系、行動・環境文化学系、基礎現代文化学系のゼミナールを対象にして実施されました。例年そうなのですが、各系のコーディネーターの教員ときわめて優秀な各系の教務補佐員のみなさんの献身的努力で大きな成果をあげました。私は三つの系の教務補佐員の方々から毎回送られる詳細な授業内容報告とプレFD検討会の様子を拝見するだけで、それだけでも毎回授業担当者に創造的な「気づき」を与えるだけでなく、検討会参加者の視点自体も深化していることがわかります。2017年度は、3年の予定で開始された、大学コンソーシアム京都と連携した単位互換リレー講義「人文学入門」の最終年度にあたりました。この授業は、京大でプレFDを修了した講師が他大学の学生も対象にしてその成果を披露する役割もありましたが、十分その役目を果たしたようです。2018年度からは、さらに継続して開講されることが決定しています。コンソーシアムで経験を積んだ講師がさらに本学に戻って京大対象の授業を担当するケースもあり、多様な教育経験を積んだ講師の成長が楽しみです。



文学研究科教授
松田 素二

各系のコーディネーターから

●哲学基礎文化学系

2017年度、またまた久しぶりにプレFDの現場に戻ってきました。光陰矢の如し。プレFD開始後10年目の節目も目前に迫っています。この間、研修を受けた講師陣からは、各地の大学で教鞭をとる人材が輩出しており、中には文学研究科のスタッフとして帰任してきた人もいます。いま全国的に見ても、プレFDは、人文社会系大学教員の教育実習制度として、一定の役割を担うようになったと言えます。現在、本学では Graduate Student Training センターの設置に向けた議論が始まっています。大学院生の教育スキルを磨くことをミッションの一つとして掲げるこのセンター構想に、プレFDがどのように関わっていくかも、近々議論されるでしょう。また2017年度の哲学基礎文化学系のリレー講義でもそうでしたが、プレFDには、かねてより、海外からの留学生も講師として参加してきました。このようなケースは、今後一層増えていくと思われます。彼ら彼女らが、将来、母国の講壇に立つことで、プレFDの成果が国境を越えて広がっていく。次の10年には、そのような光景が広がることを期待しています。



文学研究科教授
出口 康夫

●行動・環境文化学系

2017年度のプレFDのコーディネーターを担当させていただきました。本講義では、担当講師の先生方はもとより、様々な側面からの補助を担っていただいた教務補佐の方の役割の大きさをあらためて実感しました。教務補佐の武田氏には多大な尽力をいただきました。授業終了後の検討会の進行や取りまとめを要領よく進めてくださり、有機的で実りのある活発な議論ができたと思います。講師の先生方からも、自分のやっている学問を学生に伝えたいという熱意や、本当に面白いと思ってやっていることが十分伝わってきました。やはり、若い先生方の授業は、その人なりの香りがあるというか、拝聴していてとても刺激的でした。そうしたこともあってか、受講している学生も、熱心で、意欲的に授業に参加しており、グループディスカッションなどにも積極的でした。講師陣および受講生の双方にとっても、とても有益な経験になったのではないかと思います。



文学研究科教授
板倉 昭二

●基礎現代文化学系

わたしはこれまで文学研究科全体の統括コーディネーターと基礎現代文化学系のサブのコーディネーターはやったことがありますが、基礎現代文化学系の主のコーディネーターは今回が初めてで、講師の募集や授業順序、授業回数の調整も今回はじめてやらせていただきました。自分の専修以外のOD、PDの方たちと話をさせていただく機会もかなりあり、大変勉強になりました。今回検討会に参加する中で印象が深かったのが、授業と研究の関係の捉え方が分野ごと（もちろん個人の考え方の部分もあるが）にかなり異なっているということでした。その結果、授業と研究のリンクを密接なものと捉える分野の講師と、「授業は授業、研究は研究」と割り切って別のことをする分野の講師ではお互いに相手のタイプの授業に戸惑いがあり、たとえば授業資料中の文献の引用のしかた一つでもけっこうな議論が交わされていました。参加した講師の方たちには、どちらが正しいとか間違っているということではなく、いろいろな考え方があることの学びの体験と捉えてもらえればと思います。



文学研究科准教授
伊勢田 哲治

IV. プレFDの取り組み

3. 大学コンソーシアム京都との連携による単位互換リレー講義

2015年度より、プレFDプロジェクト修了後の発展的プログラムとして、大学コンソーシアム京都との連携のもと、文学研究科が提供する単位互換リレー講義「人文学入門」が開講されました。本授業は、文学研究科が初めてコンソーシアム京都に提供する単位互換授業で、京都駅近くのキャンパスプラザ京都にて実施されています。受講生は、京都大学の学生を含め、様々な大学から集まっています。また、特色ある科目として、大学コンソーシアム京都により「プラザ推奨科目」に認定されています。

2017年度は「常識を疑う 日常に隠れたメディア・コミュニケーション」を全体テーマとして、コーディネーター1名と講師7名が、アクティブラーニング型の授業を展開しました。内容は、我々が普段、言語や身体など無数の「メディア(媒体)」を通して世界を認識していること、そして日常のありとあらゆる場面で「コミュニケーション(伝達機構)」が機能していることを、歴史学や哲学、心理学、言語学などの観点から広く学ぶものとなりました。

本プログラムでは、プレFD修了生が協力し合い、個々の担当授業だけでなく、半期15回の講義全体をデザインするという経

験を積むことに主眼がおかれているため、プロジェクトは開講の1年前にスタートします。そこで、各自の担当授業と、全体目標とのすりあわせを行いながら、シラバス作成を行います。また、開講直前には、それぞれが「授業デザインワークシート」を持ち寄り、全体の到達目標を見据えて、各自の授業目標を確認、そのための具体的な授業デザインを検討し合います。

若手講師がそれぞれ創意工夫を凝らし、アクティブラーニングを取り入れた授業形式にも積極的に挑戦する本授業は、受講生から多くの肯定的評価を得ています。2017年度の実践生に授業に対する満足度を5件法(1:まったく満足していない～5:非常に満足している)で評価したところ、全体平均4.00点でポジティブな評価を得ました。また自由記述では、「授業ではなくゼミに近い形で良かった。親身さを感じた」「今まで感じることのなかったメディアと付き合うことによって、違った視線で生活を送ることができた」などの感想をいただき、プレFD修了生たちの授業が内容・形式ともに魅力的なものとなっていることがうかがえます。

●文学部単位互換リレー講義「人文学入門」

<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/literature/consortium/>

2017年度のプログラム

コースコーディネーター：文学研究科 准教授 児玉 聡

- 1 イントロダクション：大阪大学言語文化研究科 日本学術振興会 特別研究員(PD) 植田 尚樹
- 2,3 「思い込み」に気づくーマンガの事例から考える：文学研究科 研修員 トラジカーン, マシマ
- 4,5 哲学的メディア論：文学研究科 非常勤講師 満原 健
- 6,7 琉球諸語とその記録・保存：国立国語研究所 日本学術振興会 特別研究員(PD) 林 由華
- 8,9 他者に抱く印象と身体との相互作用：文学研究科 非常勤講師 蔵口 佳奈
- 10,11 日常に隠れた人間と水の関係史：大阪府立大学・嵯峨山女学院大学 非常勤講師 白木 正俊
- 12,13 人と自然をつなぐ：文学研究科 非常勤講師 長岡 徹郎
- 14 レポートの書き方：林 由華
- 15 まとめ：植田 尚樹



4. 研究科横断型教育プログラム「大学で教えるということ」

本学では、所属研究科の高度な専門教育に加えて、研究科を横断する教育プログラム(研究科横断型教育プログラム)を2009年度から実施しています。

その中の「マネジメント・キャリア・研究者倫理科目群」として、将来教育職に就くことを希望する大学院生向けの科目「大学で教えるということ」(後期集中講義)を提供しています。「大学

院生のための教育実践講座」(p.7参照)は、講義とディスカッションが主体の入門的な内容になりますが、本授業は実際の授業をデザインし、模擬授業やピアレビューを行うなど、実際に授業を実践するうえでの基礎となるスキルの育成を含めた応用的な位置づけになっています。本授業の到達目標は以下の通りです。

●研究科横断型教育プログラム

<http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/education-campus/cross/2017>

- (1) 大学教育の現状を知り、理解すること
- (2) 授業デザインに関する基本的な知識を知り、理解すること
- (3) 効果的な授業デザイン(到達目標・評価方法)を作成すること
- (4) 多様な授業方法を知り、活用方法を計画すること
- (5) 模擬授業・検討会を通じて、授業実践の技能を磨くこと
- (6) グループでの協同作業に積極的に関わること
- (7) 自身が大学で教えることに関する広い視野と具体的なイメージを持つこと

2017年度は2018年2月8日・9日・13日の3日間で実施されました。受講生は10名で、修士課程から博士後期課程まで幅広い大学院生が受講しました(教育学研究科4名、人間・環境学研究科3名、地球環境学舎2名、アジア・アフリカ地域研究科1名)。専門分野の異なるチーム(3チーム)で授業をデザインし、模擬授業を行いました。



終了後のアンケート(10名中10名が回答)では、「学生自身に考えさせる工夫がされていた(平均3.9)」「講義中に学生の質問・発言等を促してくれた(3.9)」「授業内容は(研究科・文理・分野を)横断するものであった(3.7)」「自分の専攻分野にとって重要な内容だった(3.8)」「自分の将来の進路に役立つ内容だった(3.8)」「この講義の関連分野に興味や関心が深まった(3.8)」「総合的に、自分にとって意味のある講義だった(3.8)」(いずれも4段階評価)など高い評価が得られました。

自由記述からは、「他の専門の方のお話は面白く、それと自分の専門の接点が見出せた時、全員が<同じ一つの現実>を扱っている気がして、知的な興奮がありました」「フィールドの違う人と、その場だけでなく、3日間通して一つのことをするのは刺激的でした」「大学の授業について体系的に学ぶことができた」「学際的な授業をどう組み立てていくことができるか、協働で授業を組み立てる経験ができたことは必ず今後活かせると感じた」「大学院生や研究員などが受講すべき内容がつまっていた。もっと広く周知してもよいと思う」「とても有意義な授業だったので、オススメしていきたいです!」など、様々な声が聞かれました。

IV. プレFDの取り組み

5. 人間・環境学研究科における院生発案型プレFD「総人のミカタ」

(1) 活動概要

総人のミカタは、本学大学院人間・環境学研究科(以下、人環)の大学院生が自主的に運営し、2017年度より活動を開始したプレFDプログラムです。なお、活動に際して、人環の学際教育研究部が後援しています。

本プログラムは、初回ガイダンスに加えて10回の模擬講義と2回のディスカッションの合計13回の講義で構成されています。講師となる大学院生は5名で、一人につき2回の模擬講義と1回のディスカッション(2名と3名に分かれて別日程で開催)に登壇します。模擬講義は、自身が属する専門分野の入門科目を想定してデザインし、毎回、講義を受講した他の大学院生を含めて事後検討会を行っています。

本プログラムの最大の特徴は、多分野にまたがる人環の大学院生が参加することにあります。複数分野の院生が参加することで、普段は扱わない教授法を知る機会となり、また検討会では、初学者的な視点からの指摘によって議論が活性化されることも期待されます。それだけでなく、異分野の視点に触れることは、大学院生が自身の専門分野を相対化し、理解を促進することにも効果的です。この点で、本プログラムは教育経験のみならず、それぞれの院生の研究活動にも資することができるといえるでしょう。

(2) 活動実績

2017年度は、前期・後期ともに活動し、人環に所属する10名の大学院生(修士課程2名、博士後期課程8名)が講義を実施しました。単位認定はありませんが、それでも毎回、平均して10名程度の学部生が参加しました。講義の詳細については下記webページを参照ください。

総人のミカタ：

<https://sojin-no-mikata.jimdo.com/>



講義を経験した大学院生の振り返りコメントからは、1回目の検討会での指摘を踏まえ2回目の講義で修正するよう心掛けたなど、教授法の習得や改善に効果的であったことが確認できるほか、自身の専門分野を改めて考え直す契機となった様子もうかがえます。このように、本プログラムの目的は一定程度達成されていると評価できるでしょう。

他方で、自主企画であることもあり、参加する大学院生や受講生を安定して確保することが、これから活動を継続・発展させていくための大きな課題となっています。また、本学の他のプレFDプログラムとの連携も、検討していきたいと考えています。

(人間・環境学研究科博士後期課程 真鍋公希)



V. ICTの教育的利用

1. オープンコースウェア(OCW)

京都大学OCWから公開している講義コンテンツ

京都大学オープンコースウェア(OCW)で映像が視聴できる講義は738を数えます(2018年1月現在)。本学のOCWは、通常の講義以外にも、国際会議や公開講座、最終講義、オープンキャンパス等の多様な教育コンテンツを国内外の人々に向けて精力的に発信しています。現在公開されている講義コンテンツは、講義が323、公開講座が278、国際会議が68、最終講義が69あります。FDに直接関わる講義映像としては新任教員

教育セミナーの映像が公開されています。また、本委員会のウェブサイトでは、授業をよりよくするために教員にとっても参考になるOCWの「おすすめ授業」が紹介されています。2017年度は5月30日に行われた国際シンポジウム「大学教育の創造的破壊と未来―世界最先端の次世代大学が仕掛けるエリート教育を探る―」をはじめ、英語や仏語の映像も多数公開されており、国際的にも広く発信していることが特徴となっています(図1)。

● 京都大学オープンコースウェア : <http://ocw.kyoto-u.ac.jp>



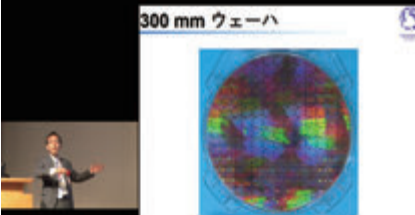
  大学教育の創造的破壊と未来 ―世界最先端の次世代大学が仕掛けるエリート教育を探る―	  第4回 iCeMS キャラバン 福島県立会津学鳳高校
  第4回 京都大学 ― 稲盛財団合同京都賞シンポジウム (KUIP Symposium)	  食塩摂取→血圧→脳卒中死亡? エレベータのブザーは鳴るか ―大学生のための統計学入門―

図1 2017年度に公開されたOCWの例(各QRコードから映像のページへアクセスできます)

京都大学オープンコースウェア(OCW)について

京都大学OCWは、学内で実際に行われている講義のビデオや教材をインターネットで公開するプロジェクトで、2005年より国内外に向けて講義コンテンツを発信してきました。本学の学生や教職員、他大学の学生、関連学協会の研究者、本学への入学を目指す高校生、スキルアップのためにさらなる学習を志す社会人など、あらゆる方々に門戸を広げ、本学が行っている「教育」を多くの人に知ってもらうことを目的としています。また教育情報の公開を目的として、全部局のシラバスにOCWからアクセスできるようになっています。これまで蓄積されてきた700以上の教育コンテンツをどのように学内の授業等で活用していく

か、高等教育研究開発推進センターに設置された教育コンテンツ活用推進委員会において議論・検討されています。今後も、世界へ向けて本学のビジビリティを高め、教育・研究から生まれた知識を広く社会に提供できるように、コンテンツを充実させていきます。OCWは、人類の知的資産への貢献とその共有を目指して、世界各国とのコミュニケーションを高め、国際交流を推進します。

OCWのコンテンツ制作は、高等教育研究開発推進センターの教職員と学生スタッフで、講義収録、編集、推進を行っています。みなさまもOCWを通じて講義コンテンツを公開してみたいかがでしょうか。

V. ICTの教育的利用

2. KyotoUX : 大規模オープンオンライン講義(MOOC)

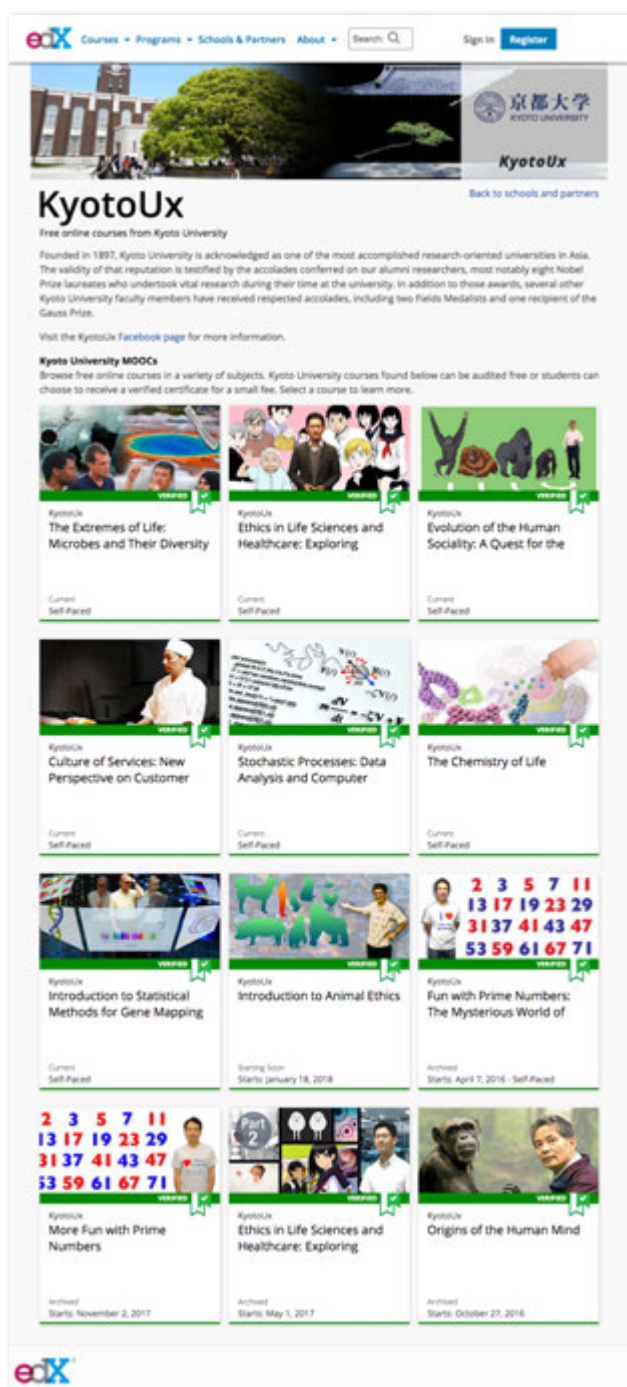


図1 edXのサイト(KyotoUxからの提供講義)

(1) 京都大学におけるMOOC

京都大学は、MOOC(Massive Open Online Courses : 大規模オープンオンライン講義)プラットフォームのedX(<https://www.edx.org>)を通じ、全世界に向けて英語による無償のオンライン講義を配信しています。OCWも本学の教育をインターネットを通じて世界に公開するという「教育のオープン化」に関わるプロジェクトですが、MOOCは大学の講義と同様に、開講期間が設けられており、受講者は毎週の講義内容が講義ビデオや課題に取り組みながら学習を進められることが特徴です。担当の教員に質問することもできますし、課された問題や試験に解答し、一定の成績を満たした受講者¹⁾には修了証が発行されます。このように、文化や学歴も多様な世界中の受講者と一緒にオンラインで交流しながら学習を進めるMOOCは、高等教育の新しい講義提供方法として世界的に大きな注目を集めています。

edXは、ハーバード大学とマサチューセッツ工科大学が中心となり設立された、世界トップクラスの大学や教育機関、企業等で構成されるMOOCの大学コンソーシアムです。京都大学は世界トップレベル54校から成るチャーター校として日本で初めて参加し、「KyotoUx」という名称で講義を配信しています(図1)。MOOCの制作や運用、分析・評価については高等教育研究開発推進センターが担当部局となっており、2017年度は新規2講義を含む12講義が開講されました(表1、図2)。新規講義のうち、「More Fun with Prime Numbers」は、伊藤哲史理学研究科准教授による数学の「素数」をテーマとした講義で、伊藤准教授が提供する2つめのMOOCです。過去に提供した4週間の講義のコンテンツ(講義ビデオ・課題等)をすべて刷新し、身近な素数の応用例として暗号化に関するトピックなどが追加されました。伊勢田哲治文学研究科准教授による「Introduction to Animal Ethics」は、各週で扱うテーマの導入として漫画を教材に利用した動物倫理に関する講義です。これらの新規開講の講義を含め、多くの講義が再開講により受講登録可能となっています。ご自身の興味や関心に応じてアクセスしてみたいかがで

注1 : 受講者が修了証を得るためには有償(現在は\$49)の Verified Trackに登録する必要があります。

表Ⅰ 2017年度開講講義

開講時期	講義名	講義担当者	配信期間*	備考**
4月1日～ 2018年3月31日	The Chemistry of Life	上杉 志成 教授 (物質・細胞統合システム拠点／化学研究所)	15週 Self-paced	4回目
4月1日～ 8月10日	Culture of Services: New Perspective on Customer Relations	山内 裕 准教授 (経営管理大学院)	8週 Self-paced	3回目
4月1日～ 2018年2月29日	Introduction to Statistical Methods for Gene Mapping	山田 亮 教授 (医学研究科)	4週 Self-paced	JGP 3回目
4月17日～ 10月26日	Ethics in Life Sciences and Healthcare: Exploring Bioethics through Manga	児玉 聡 准教授 (文学研究科)	5週 Self-paced	JGP 2回目
5月1日～ 11月9日	Ethics in Life Sciences and Healthcare: Exploring Bioethics through Manga – Part 2	児玉 聡 准教授 (文学研究科)	5週 Self-paced	JGP 2回目
8月3日～ 2018年8月2日	Introduction to Stochastic Processes: Computer Simulation and Data Analysis	山本 量一 教授 (工学研究科)	6週 Self-paced	JGP 2回目
9月21日～ 2018年3月29日	Culture of Services: New Perspective on Customer Relations	山内 裕 准教授 (経営管理大学院)	8週 Self-paced	4回目
11月2日～ 12月7日	More Fun with Prime Numbers	伊藤 哲史 准教授 (理学研究科)	5週	JGP
11月9日～ 2018年9月13日	Evolution of the Human Sociality: A Quest for the Origin of Our Social Behavior	山極 壽一 総長	6週 Self-paced	2回目
12月21日～ 2018年10月25日	Extremes of Life: Microbes and Their Diversity	跡見 晴幸 教授 (工学研究科)	4週 Self-paced	JGP 3回目
12月21日～ 2018年9月20日	Ethics in Life Sciences and Healthcare: Exploring Bioethics through Manga	児玉 聡 准教授 (文学研究科)	10週 Self-paced	JGP 3回目
2018年1月18日 ～2月22日	Introduction to Animal Ethics	伊勢田 哲治 准教授 (文学研究科)	5週	JGP

* 配信期間欄の“Self-paced”は、開講時にすべての講義コンテンツが公開され、講義終了までに受講者自身のペースで学習を進める講義形態です。

** 備考欄の“JGP”はスーパーグローバル大学創成事業「京都大学ジャパングートウェイ(JGP)」からの提供講義です。
これらの講義は本事業の助成を受け開講しています。また、回数は再開講を表しています。



図2 2017年度新規講義の紹介ビデオ(左:伊藤哲史准教授、右:伊勢田哲治准教授)

V. ICTの教育的利用

(2) MOOCのコースカタログ

本学が提供するMOOCに関して、学内の教職員に対する周知や普及促進をはかるため、高等教育研究開発推進センターにおいて、これまで制作してきた講義の内容や関連する情報を集約し、その全体像を俯瞰できるようなツールとしてコースカタログ「Learn on the Planet」が制作されました(図3)。

これまで公開されてきたMOOCの開講・再開講の時期を一覧にした「Course Offerings」や、講義ごとにその概要や特徴・魅力を、講義ビデオ等の画像や受講者のコメントなどとともに紹介する講義紹介ページ、MOOCを担当した本学の教員や、

講義制作や受講者対応に関わった大学院生の体験談なども掲載されています。また、MOOCの教材を学内の講義で反転授業の教材やディスカッションの題材として活用している事例も取り上げています。MOOCはオンライン講義を新たにデザインし制作するという側面からはFD・授業改善の機会ともなっています。MOOCの取り組みに興味をお持ちの方、今後MOOCで講義を配信してみたい方は、以下のURLよりPDF版がダウンロードできますので是非ご一読ください。

<https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/connect/resources/kyotoux.php>



図3 コースカタログ(抜粋)

(3) MOOCの制作・運用について

MOOCの制作や開講期間中の運用については、高等教育研究開発推進センターの担当スタッフにより、講義担当教員の目的や要望に合わせた様々な支援が行われています。

講義ビデオは主に学内の撮影スタジオで収録しますが、大型モニターを利用した教材スライドの提示や、画像合成技術を用いて作成されます。スタジオ内での撮影以外にも、実験風景やフィールドワーク、ゲスト講師によるミニ講義など、教員のニーズに応じた教材の制作支援が行われています(図4・5)。また、MOOC上の問題や最終試験等の課題は自動採点されるため、

これまで大学の中で行ってきた成績評価の方法をそのまま適用できない場合があります。その際にも講義の目的や教員の出題意図に合わせた課題設定の提案や支援も行われています。

開講期間中の受講者の学習支援は、講義ごとに設置された掲示板を通じて行われます。講義の専門的内容に関する質問に対しては、専門分野の知識を持つ大学院生等をTAとして雇用して回答するケースもあり、教育研修の機会ともなっています。また掲示板は受講者同士の学び合いや議論・交流の場としても活用されています。

表1 MOOCの制作・運用の流れ

STEP 1 事前打ち合わせ	講義内容、配信期間、講義ビデオ制作、課題の出し方、TAを含む支援体制等について、担当教員の方針や要望を取り入れながら、制作する講義の全体像をつくっていきます。
STEP 2 講義紹介ページ配信	講義の魅力や概要を伝える紹介ビデオを制作・公開し、講義開始までに受講者を募集します。
STEP 3 講義コンテンツ制作	講義ビデオの撮影や課題制作等を行います。講義配信までにすべてのコンテンツを準備します。
STEP 4 講義配信	edX上に講義コンテンツを設置し、講義を配信します。講義開始から終了まで1週間ごとに講義コンテンツを追加します。
STEP 5 講義配信終了	講義終了後、Verified Trackのうち基準を満たした受講者に対して担当教員の署名入り修了証を発行します。



図4 専門スタッフによるMOOCのビデオ制作支援・スタジオでの撮影の様子

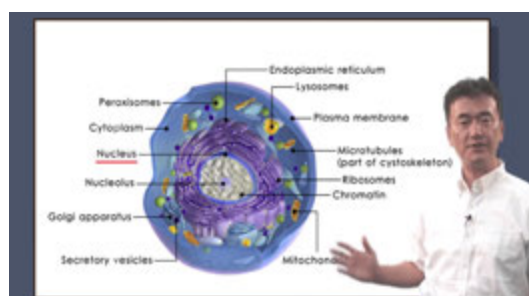
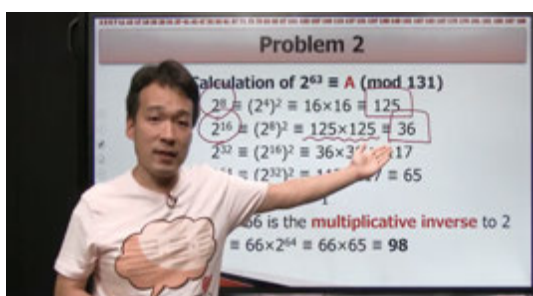


図5 講義スタイルに合わせた講義ビデオの作成

V. ICTの教育的利用

3. KoALA: 小規模プライベートオンライン講義 (SPOC)

SPOCについて

MOOCが全世界に向けて配信するオンライン講義であるのに対し、各大学の中で学生向けに提供するオンライン講義・教材・学習環境を総称してSPOC (Small Private Online Courses) と呼びます(図1)。MOOCと同様の教育学習環境を利用したSPOCの取り組みに世界的に注目が集まっています。

講義ビデオや課題作成を含めた完全なオンライン講義を制作する必要があるMOOCと異なり、SPOCは、各大学や教員固有の目的やニーズに応じた柔軟な利用形態が可能となります。例えば、通常の授業のように特定の講義の受講者のみに教材へのアクセスを制限する以外に、学内外を問わず広く受講者を募ることも可能です。講義の視聴や課題への取り組み状況を、学習データ分析ツールでモニターし、それに応じて翌週の授業内容や進度を微調整することもできます。また、反転授業や予復習のための教材を学生に提供することで、教室内での時間を有効活用できるようになります。また、オンライン講義・教材作りに関わる教員や大学院生にとっては、授業改善や教育研修の機会と捉えることもできます。SPOC導入により、学生の主体的・能動的学習を加速・後押しするとともに、今後の本学におけるMOOCの質的向上・量的増大にも繋がることが期待されます。

KoALAについて

edXのプラットフォームがオープンソース化された「Open edX」を利用し、主に本学の学生や教職員が利用することを目的として、「KoALA: Kyoto University Online for Augmented Learning Activities」の導入を高等教育研究開発推進センターで進めています。学内の講義での活用のほか、個別のニーズに応じて一般公開等のオプションの提供が予定されています。

KoALAの試行として、坂出健経済学研究科准教授によるオンライン講義「国際政治経済学」(7週間)が制作され、坂出准教授の担当する学部生向け「経済史2」の受講者に対し、11月から12月にかけて講義の課題の一部として公開されました(図2)。この講義は、国際政治学と国際経済学の複合的な視座から国際社会の問題に対し、理論・歴史・政策の面からアプローチし、現代社会を多角的に見る方法を学習する内容で、受講者は各週の講義ビデオで内容を学び、課された課題で理解度を確認しながら学習を進めました。このほか、2講義で試行が予定されており、次年度の本格稼働に向けて準備が進められています。

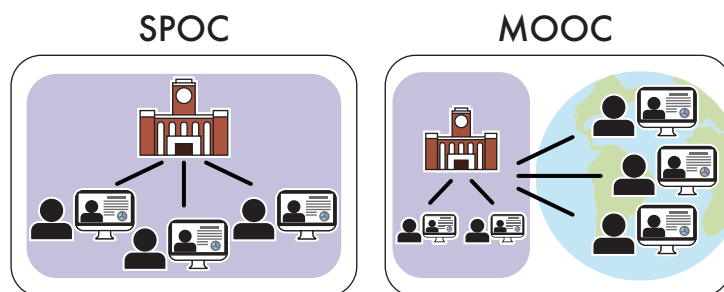


図1 SPOCとMOOC

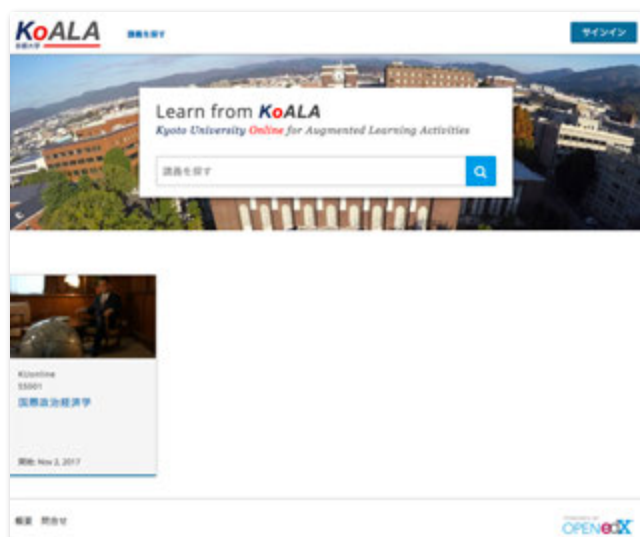


図2 KoALAの画面例(左:トップページ、右:「国際政治経済学」より)

4. ICT教育活用のためのポータルサイト (CONNECT)



図1 CONNECT 主要コンテンツ一覧

本サイトは、全学から構成員を募って組織されている「教育コンテンツ活用推進委員会」のもと、高等教育研究開発推進センターが2016年度に構築したもので、2017年5月に正式にオープンしました。本学の教職員に向けてICTを利用した教育コンテンツ（MOOC、OCW*、講義ビデオ、教材等）を制作・活用するための情報を提供しており、月に約2回のペースで新しい記事を公開しています。また、外国人教職員がアクセスしやすいように、日英両言語に対応しています。

(1) CONNECTの特徴と概要

本学では、これまでMOOCやOCW、PandA**、KoALA***といったICTを利用した教育コンテンツやプラットフォームを全学として整備・運用しています。しかし、これら多様なICTコンテンツ・プラットフォームの一方で、それらを制作・活用する上で必要となる情報をまとめたウェブサイトはこれまでありませんでした。CONNECTはこれらの情報を一つのウェブサイトにもとめ、目的別に適切なサイトへと誘導するポータルサイトです。主要コンテンツは図1をご覧ください。

(2) CONNECTの閲覧・利用状況

本サイトの公開後、ちょうど半年にあたる2017年11月、CONNECTの閲覧・利用状況について、Google Analyticsを用いて確認しました。学内外のアクセス状況を比較したところ、月間平均PV（ページビュー）数（約2,800 PV）のうち約3分の2が学内からのアクセスによるものでした。また1アクセスあたりの平均滞在時間をみると、全体の平均が約5分なのに対して、学内からでは約9分と、4分ほど長いという結果となりました。本学の関係者からの関心が総じて高い、ということが言えるかと思います。今後より一層魅力的なコンテンツを拡充することで、本学の教職員にとって有益な情報を継続的に伝えていく予定です。また、PV数、平均滞在時間と合わせて、どのような記事がよく見られているかについて確認したところ、次ページ以降で紹介する「Topics」関係の記事が、よく見られていることがわかりました。これらの結果は、2017年度の「教育コンテンツ活用推進委員会」第2回の会議で報告されました。

* MOOCおよびOCWについては、それぞれ、p.14-17とp.13 に説明があります。

** PandAは情報環境機構が全学に提供している学習支援システム（LMS: Learning Management System）です。

*** KoALAについては、p.18をご覧ください。

V. ICTの教育的利用

(3) Topics

「Topics」では主に、ICTを用いて特徴のある授業を行っている学内の教員の事例を、インタビュー形式で紹介しています。現在利用しているICTをなぜ授業に導入したのか、その効果といった点のみならず、授業にかける思いや、苦労を通じて感じた手応えといった、経験者だからこそ語ることのできる話が盛り沢山です。

また、その他のICT活用教育に関連したイベントの開催報告や、「Trends」のバックナンバーもこちらでご覧いただくことができます(図2)。次ページ以降では図2中で赤枠で囲みました、水原啓暁情報学研究科講師、吉田純人間・環境学研究科教授のインタビューの抜粋を掲載しております。

教員インタビュー

- 一人ひとりの学習スタイルの尊重を目指す反転授業
薬学研究科 金子周司先生
- 電子教科書を用いて目指す「より人間らしい」教育
理学研究科 馬場正昭先生
- 講義をもっとオープンに
医学研究科 山田亮先生
- 多様な文化の中で漫画を通して学ぶ生命倫理
文学研究科 見玉聡先生
- おもてなしの議論を通して異文化を理解する
経営管理大学院 山内裕先生
- 「ニコ動的講義」が生み出す教員と学生のシンクロ
情報学研究科 水原啓暁先生
- MOOCを通してつかんだ教え方のヒント
工学研究科 跡見晴幸先生
- 気軽に参加できる数学講義
理学研究科 伊藤哲史先生
- TwitterとPandAによって変容するコミュニケーションの質・関係性
人間・環境学研究科 吉田純先生

イベント 開催報告

- 総長 MOOC イベント
“President’s MOOC ‘Evolution of the Human Sociality’ Live!”
- 国際シンポジウム
「MOOCは大学教育をどのように進化させるのか」
- 国際シンポジウム
「MOOC時代の大学教育改善」
- 国際シンポジウム
「学習のための、学習としての評価 - PBLとMOOCにおける学習評価の可能性 -」
- 学内ワークショップ
「教育の最先端：MOOCって何？ - その利用法と実践ノウハウまで -」

Trends：最新の ICT 活用教育動向

- 「MOOCをめぐる最新動向」 (第1回：2017年6月30日配信)
- 「高等教育にもVR・AR」 (第2回：2017年7月11日配信)
- 「人工知能(AI)と高等教育の未来？」 (第3回：2017年7月21日配信)
- 「MITにおけるICT活用教育推進のための学内イベント “MIT Teaching with Digital Technology Awards”」 (第4回：2017年9月20日配信)
- 「ライス大学による電子教科書プロジェクト “OpenStax”」 (第5回：2017年10月4日配信)
- 「アリゾナ州立大学によるMOOCを用いた初年次教育 “Global Freshman Academy”」 (第6回：2017年12月7日配信)

... and more!

図2 「Topics」コンテンツ一覧

ICTを使って特徴のある授業実践をされている先生の情報をお待ちしております。前ページ図1の⑦で紹介している「お問い合わせフォーム」等からご連絡ください。

教員インタビュー(1)



水原 啓暁 情報学研究科講師

「ニコ動的講義」が生み出す 教員と学生のシンクロ

【プロフィール】 理化学研究所、岡山大学講師を経て、2007年4月より現職に。専門は認知神経科学。情報学研究科だけでなく、教育学研究科、文学研究科でも授業を担当。全学共通のリレー講義「神経科学の基礎」では、数百名の学生を相手に、公開ツールを使って、双方向型の講義の実現に取り組まれている。

授業の形式ですが、「ニコ動的講義」とでも呼べば良いでしょうか。

はい、ただ正式には、「パパパコメント」という公開ツールを使ったものです。教員が予めPCにインストールし、学生が、オンライン上で専用サイトにアクセスしてパスワードを打ち込めば、講義で投影されているスライド上に文字を送ることができます。

「パパパコメント」を用いるメリットとして、何が大きいですか。

まずは学生が授業やスライドに興味を持ってくれる点ですね。何百人も参加する大規模講義の場合、放っておくと、学生は寝てしまったり前を見なくなったりしますから。

また、「パパパコメント」を介して学生にコメントや質問をしてもらうことで、学生にとってどこが分かりづらいのかがみえてきました。そういった箇所については、繰り返し説明するようにし、その結果、学生の理解を促せていると感じています。



「ニコ動的講義」の様子。撮影時は、水原先生の講義が終了して
いたため、同僚である情報学研究科辻本悟史先生の講義風景をここでは用いている。



先生が専門とされている脳とコミュニケーションの関係、という観点からいって、この講義形式はどういえるのでしょうか。

近年、私が着目している現象として「シンクロ」というものがあります。それぞれ別のタイミングで振れている二つのメトロノームを、一つの基盤の上に置き、力を伝え合わせると、針の振れ方はシンクロし、最終的に一致します。これと同じことが、音声を通じたコミュニケーションにもいえるのではないかと考えているのです。すなわち、音声ももつリズムが脳と脳をシンクロさせ、新しい知識が生まれるのではという考えです。この講義の場合、「パパパコメント」というツールが、シンクロを促す「基盤」になっているといえるかもしれません。

学生の反応はいかがですか。

去年の授業評価アンケートを読む限り、こちらが工夫していることを学生は評価してくれているみたいです。また、学期の終わりに近づいても、400名超の履修登録者に対して300名以上は出席しているので、全学共通科目の大規模講義としては、比較的良好な出席状況ではと考えています。

他にはどんな工夫をされているのですか。

教務情報システムであるKULASISに解説をつけた予習教材をアップするとともに、授業中は板書の「写メタイム」というのをとっています。これは講義中、書くこと以上に聞くことに集中して欲しいからです。あえて板書を採用しているのは、学生によってはアナログじゃないと受け入れられないこともあるからです。すべてデジタルであればいい、という訳ではないですね。

先生がそれだけ授業に対して熱意を注がれるモチベーションはどこにあるのでしょうか。

大きく分けて二つですね。一つは、神経科学という学問と「快感情」とを結びつけて記憶して欲しいという気持ちです。神経科学を楽しんでいると、研究室に入ってきてくれる学生が増えたら、私たちとしてもハッピーですね。

もう一つは、どうせやるなら教員も楽しみたいという気持ちですね。私自身も決して教育に燃えている訳ではありません。ただ、自分が楽しくないものをやっても、お互い無駄な時間を過ごすだけだから、ならば、自分自身も楽しいと感じれるものをやろうと。学生とコミュニケーションをとって、質問への応答やコメントを介して笑いが起こる。そのなかで、神経科学という学問に対する理解を深めてもらえる。そんな時間にしたいですね。

最後に何か、授業をより効果的なものにしたいと考えている他の先生に対して、メッセージのようなものを頂けますでしょうか。

「メッセージ」というと、おこがましいですが、私自身、経験を通じてインタラクティブな講義はとても重要だと感じています。私のやっている脳の研究でも、一方通行の情報だけだと情報が伝わりづらくなるということが分かっています。学生がどう考えているのかを、その時々に応じて、ダイナミックに判断してあげるのが重要かと思います。

このことは、授業の「一回性」というものにも関係してくるかもしれません。そういった双方向的なやりとりがないのであれば、極論をいえば、ビデオでずっと流しておけば良いともいえます。わざわざ私たちが現場に行き講義する目的を考えたときに、学生の反応をみながら、授業をおこなうことに意義があるのかなと思いますし、そのことは強調しても良いかもしれませんね。

(CONNECT掲載中の記事より、抜粋・改変)

水原先生のインタビュー記事のオリジナル版は
以下よりご覧ください。

<https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/connect/topics/mizuhara01.php>

V. ICTの教育的利用

教員インタビュー (2)



吉田 純 人間・環境学研究科教授

TwitterとPandAによって変容する コミュニケーションの質・関係性

【プロフィール】 本学文学部助手、総合人間学部助教授、高等教育研究開発推進センター教授を経て、2014年4月より現職に。専門はメディア社会学。全学共通科目「社会学Ⅰ」及び、学部・大学院共通科目の「社会情報論」で、Twitter、PandAを用い、「可視性」と「双方向性」を備えた授業実践に取り組まれている。

まず、どのように授業にICTを取り入れているか教えてください。
Twitterを使って、講義中にリアルタイムで意見や感想をツイートしてもらっています。また、PandAのコースサイトを用いて、「公開アサインメント」という復習課題と、リフレクション・シートにあたる「リアクション・コメント」を書いてもらっています。前者は2013年から、後者は2012年から使っています。それまでは、自分で作った専用サイトで同様の取り組みをしていました。

学生によるTwitterでの「つぶやき」は、質問と感想どちらが多いのですか。

感想の方が圧倒的に多いですね。質問の場合も「国家は必要なのですか」といった比較的素朴な質問が多いように感じます。ただこの質問もグローバル化の話との関係では本質的な質問です。こういった質問については、授業中に取り上げ、文脈に沿った形でコメントと解説をしています。

「つぶやき」も平常点に反映されるのでしょうか。

はい。ツイートだけでなく、「公開アサインメント」への回答、「リアクション・コメント」への回答、すべて、それぞれに点数を割り振って、平常点として換算しております。平常点は最大で40点なので、フルに参加している学生だと、すぐに上限を超えてしまうのですが、それでもコメントする学生はどんどんとコメントしています。平常点だけが目的という学生ももちろんいますが、参加すること自体が面白いと感じている学生も少なくないようです。

「社会学Ⅰ」でのTwitterのやりとりの様子 (画像提供: 吉田先生)



ICTを利用することで学生の「学び」に変化はありましたでしょうか。

授業中の学生の参加意識のようなものを含めて考えますと、実感として学生の「学び」は活性化しているように思います。面白い「つぶやき」や「公開アサインメント」は、授業中に紹介してコメントをするようにしているのですが、紹介された学生は「緊張したけど、励みになった」というような感想を残しています。

学生の感想や意見を取り上げるという点では、従来の紙のリフレクション・シートへの記入という方法もあるかと思いますが、あえてTwitter、PandAを利用されている理由はあるのですか。

従来の方法と大きく異なるのは、学生同士で他の学生が何を書いているかが読める点ですね。私自身、質問や感想の中身を「公開」することが重要と考えていることもありますが、学生の感想にも「他の学生が何を考えているのかわかって、大変刺激になった」というような感想も多く、当初の目的を果たせていると思います。

もう一つの違いとしては平常点の計算の際にデジタル・データで残っていることで、参照しやすくなるという教員側のメリットもあります。紙ですと1枚、1枚手で確認する必要がありますからね。

お話を伺っていると学生の参加を重視して授業を設計されているように感じます。

そうですね、私自身、参加すること自体が面白いコミュニティとしてのICTやコンピュータ・ネットワークに魅せられたのが、今の研究の始まりだったのですが、教員と学生という一種の権力関係に縛られずに自由に発言できる場を作る上で、Twitterというある程度匿名性のあるシステムを使うのは有効だったと感じています。従来の講義では、人数や学生同士の関係性の問題で出づらかった質問が、Twitterを用いることで、すぐ出やすくなってきていますね。

講義で扱う量は削減しないで、学生の参加意識を引き出し、双方向に近いコミュニケーションを実現するにはどうすれば良いかということをやっと考えてきたのですが、その解の一つが今の方式と言えるかと思います。

過去10年以上にわたって、ICTを授業に取り入れられてきたご経験から、何かアドバイスや提言のようなものはございますか。

ICTを実際に授業で取り入れて使う際には、事前に試行期間を設けた方が良いと思います。使う上でのコツが分かったり、あるいは、思いがけないトラブルがあったりすることもありますので。また、そういった教員個人の慣れや技術の問題と同時に、大学としても、教員がICTを導入するハードルを低くするような手当があると良いと思います。教員のリテラシーに左右されないよう、サポートしてくれる仕組みを整備・構築してくれることを大学には期待したいですね。

(CONNECT掲載中の記事より、抜粋・改変)

吉田先生のインタビュー記事のオリジナル版は
以下よりご覧ください。

<https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/connect/topics/yoshida01.php>

5. PandA連携ワーキンググループの活動

情報環境機構では2013年より、全学に対して学習管理システム(LMS)「PandA」を提供しています。PandAなどのLMSは個々の授業を支援するために様々な機能をもっていますが、それぞれの教員の活動は各コース用のサイトの中で行われます。このためPandAの利用率が高まる一方で、個々の教員のコースケースの把握が難しいという現状がありました。そこで、PandAの効果的な教育利用を促進することを目的に、PandA連携ワーキンググループ(WG)が設置されました。

PandA連携WGは、全学から構成員を募って組織されている「教育コンテンツ活用推進委員会」内での議論を経て、2017年度、同委員会に設置されたものです。

このWGでは高等教育研究開発推進センターと情報環境機構が協力する形で、PandA利用のためのコンテンツの整備などを行っています。



PandAのトップページ (Gateway Page)
(<https://panda.ecs.kyoto-u.ac.jp/portal/>)

PandA連携ワーキンググループ

国際高等教育院：喜多 一 教授（情報環境機構長）〈世話役〉

情報環境機構：梶田 将司 教授

企画・情報部 情報基盤課教育用システム管理掛：外村 孝一郎 掛長

高等教育研究開発推進センター：飯吉 透 教授、田口 真奈 准教授、酒井 博之 准教授、
鈴木 健雄 特定研究員

V. ICTの教育的利用

PandA連携WGでは、2017年度内に計3回の会合をもち、以下の活動を行いました。



PandA利用促進コンテンツ

「PandA利用【文系・ゼミ・討論中心】—いつも忙しいM下教授の日常に、もしPandAがあれば—」イメージ(一部)

<https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/connect/ht/panda/step1.php>

(1) PandA利用促進コンテンツの新規作成

PandAの利用方法のモデルを提示することで、利用のためのハードルを下げることを目的に、議論を経たうえで、「PandA利用【文系・ゼミ・討論中心】—いつも忙しいM下教授の日常に、もしPandAがあれば—」というコンテンツと、「松井先生 PandAにケンを売る」というコンテンツを制作しました。

前者は、半期の授業全体を通じて、PandAがどのように活用できるかをストーリー形式で紹介するものです。モデルとした教員の授業実践と活用方法を踏まえたうえで、架空の教員が文系の少人数授業で文献講読と議論を行うという設定で制作しました。

後者は、PandAの「ヘビー・ユーザー」である教員が、擬人化さ

れたPandAとその仕様について議論をするなかで、結果的にPandAの利用可能性を紹介するというものです。これらはCONNECT(p.19-22)内で公開されています。

今後、「PandA利用【理系・大講義編】」などが制作される予定です。

(2) PandAユーザー・マニュアルの改訂とインターフェイスの改良

情報環境機構が作成・提供している「PandA公式ガイドブック(教員用マニュアル)」に、コンテンツの追加を行いました。これは、「(1) PandA利用促進コンテンツの新規作成」に伴って行ったもので、モデルとした教員から、学生が発表資料を共有したり、ディスカッションを行ったりするのに大変有用だという声のあった「フォーラムツール」に関する記述の追加と、どうしても煩雑に感じてしまうという声のあったKULASISとPandA間での成績の連動に関する「Tips」の追加となります。合わせて、英語版マニュアルの方も、日本語版の教員用マニュアルの内容と対応する形で改訂しました。これによって、日英両言語ともに、教職員向けのサポートが一層充実されました。

また、LMSに不慣れな利用者にとって馴染みづらいとされていたPandAのトップページ(Gateway Page)の改善点を検討し、その結果を踏まえて、Gateway Page上に説明を追加するとともに、情報の配置を変更しました。これによって、初見の学生、教職員にとっても、より「ユーザー・フレンドリー」なインターフェイスが実現されました。

(3) 学部・研究科への支援

PandA連携WGでは、各学部・研究科からの依頼を受けて、PandA活用の支援を行っています。2017年度は医学部医学科と人間健康科学科から依頼・照会がありました。2017年度まで利用していたLMSから次年度のPandAへの移行を検討している医学部医学科では、計3回の合同検討会を開くとともに、年に1度開催されている全医学部教授を対象とした医学部教育ワークショップの場で、PandAの機能説明、活用事例紹介を行いました。また、人間健康科学科の教員会議でも同様の説明会を行いました。これらの説明会では、「大変参考になった。もっと学内で活用事例を知りたい」という声がありました。

医学部教育ワークショップでの説明の映像は、医学部構成員向けの研修教材としても利用される予定です。



医学部教授会の教育ワークショップでのPandAの説明の様子

高等教育研究開発推進センターウェブサイトリニューアル

2017年7月、高等教育研究開発推進センターのウェブサイトのリニューアルしました。従来の日本語サイトの刷新に加え、英語サイトも充実させました。今回のサイトでは、教員の抱える悩みや教育改善の工夫などを集約し、より双方向的なものにしたいと考えています。そのため、①必要な人に必要な情報を届けるための情報設計、②発信した情報を元に、教員との交流を促しPDCAを回す仕組みを構築することを目指してきました。

例えば、本学教員の疑問に答える「教育上の問題解決」のページを設けたり、特色ある取組(カリキュラムや授業など)を「教員インタビュー」によって可視化したり、できるだけ実践に役立つ情報を提供していきたいと考えています。まだまだコンテンツも少なく、その実現には時間がかかりますが、少しずつ育てていきたいと思っています。ぜひ、当ウェブサイトを訪ねていただき、ご質問やご要望、情報提供などいただけると幸いです。



サイトURL(日本語版) : <https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp>
※英語版は末尾に/en/



教育上の問題解決のページ

ある時は、教員とお茶を飲みながらオリジナルの教育手法について談笑し、

ある時は、新任教員セミナーで名物教員のインタビューを紹介し、

ある時は、自身の記事掲載を若手教員に伝えているベテラン教員の姿を目撃し、

ある時は、フォーラムで他大学の教員からサイトについて話題が聞こえる。

そんな風景が浮かぶための中心となるサイトをイメージしました。



教員インタビューのページ

FD研究検討委員会概要

FD研究検討委員会は、本学の教育担当理事、各部局から選出された教員、高等教育研究開発推進センター所属の教員に事務部代表を含む30名程度の委員から成ります。この委員会と高等教育研究開発推進センターが協力して、必要に応じて検討課題に対応したプロジェクトチームを立ち上げ、FD活動推進への取り組みを行っています。

京都大学のFDに関する取り組みについては、FD研究検討委員会のウェブサイトをご覧ください。

サイトURL : <http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/>



Kyoto University
Faculty Development

2017 Mutual Faculty Development